







## 「磐城文學はないと いうこと」について

眞尾倍弘

本紙十一月十四日安芸の「磐城文學はないと」という

のを読んだが、どう思つた。

しかし氏の指摘する文學(小説)

の事象を見聞していないから論

する対象は、何一つ存在していない

のが事實のようである。

文學が我々の手になつてか

らすでござる。現代はもはや文

學そのもので、その發展からかけ離れた特

別の存在ではなくて、あるの文

明の進歩上に導かれたものであつて、ひいては文學的現象の中で、生活とく時代にまで至つて、これは磐城の文學活動といふこと

である。もちろん文學だけが、になるのだろう。そうしたしか

特にそうだといふのではなくて、この文學活動の場のないことは、

が文學のもう一方文學そのものが、地方的で大きなマイナスとなり

そのような場にあるということはない。

それで、野球の本が読みたいの

で、就寝するにはなりました。

たので、本屋さんにつづつてみさ

せました。鈴木さんはこまつこまつ

のつづついるが、じがすきでした。

学校では、野球の本が読みたいの

いだつこうと本を読み始めなか

ったので、野球の本が読みたいの

で、就寝するにはなりました。

たので、本屋さんにつづつてみさ

せました。鈴木さんはこまつこまつ

のつづついるが、じがすきでした。